

令和4年度 JACET 中国・四国支部
秋季研究大会研究発表題目&発表要旨

日時：2022年10月22日（土）13:00～14:15

- ・実施方法：遠隔で実施
- ・事務連絡：研究大会への参加申込をされた方にのみ，Zoom 会議に参加するための URL を送らせていただきます。詳細はメールで連絡させていただきます。

(13:00～13:05) 開会式 司会 寺嶋建史（松山大学）
開会の辞 支部長 岩中 貴裕（山口県立大学）

研究発表題目

司会 山中英理子（広島国際大学）

(13:10～13:35)

発表1：大学英語授業における心理的安全性に関する一考察（A Note on Psychological Safety in University English Classes）

森谷浩士（岡山大学）

(13:40～14:05)

発表2：海外留学プログラムにおける学生の変容：BEVI を用いた分析（Assessment of Students' Transformation in a Study Abroad Program Using BEVI）

山川健一（安田女子大学）

(14:10～14:15) 閉会式 司会 寺嶋建史（松山大学）
閉会の辞 高橋 俊章（山口大学）

研究発表要旨

発表1：大学英語授業における心理的安全性に関する一考察（A Note on Psychological Safety in University English Classes）

森谷浩士（岡山大学）

応用言語学の中心的課題のひとつに外国語学習者の心理がある。外国語不安もその一分野として確立され、研究成果が蓄積されている。しかし、大学英語授業のように、グループ発表、相互評価といったグループでの活動が多く行われる場合、学習者は外国語不安だけでなく、発言内容に対する他者からの評価に関する不安にもさらされる。その不安のせいで、学習者が率直な意見交換を避けるようであれば、グループ活動の効果も限定的になると思われる。つまり、教師には、学習者が率直に意見を述べることに對する不安が生じない心理的に安全な教室環境の創出が求められる。そこで、筆者は自身の授業が受講生の心理的安全性を高めているかを調べる目的で、

以下の研究設問に対するアンケート調査を行った。

- (1) 学習者は心理的安全性を高めるための教師行動をどの程度認識しているか。
- (2) 筆者の授業で学習者が感じた心理的安全性のレベルはどの程度か。
- (3) 上記(1)(2)より、教師行動の認識と学習者の心理的安全性のレベルに関係はあるか。

調査協力者は筆者の授業の受講生 105 人で、次の結果を得た。(1) 学習者は教師行動を認識していたが、(2) 心理的安全性のレベルはそれほど高くなく、(3) 両者の関係は弱い相関にとどまった。本発表では、大学英語授業における心理的安全性の研究を進めるうえでの課題を整理したい。

発表2：海外留学プログラムにおける学生の変容：BEVI を用いた分析（Assessment of Students' Transformation in a Study Abroad Program Using BEVI）

山川健一（安田女子大学）

「グローバル化」に対応できる人材の育成の必要性が急速に唱えられてきている近年、多くの大学においても留学が教育プログラムに組み込まれている。「留学」はグローバル人材の育成に貢献すると一般的に考えられているが、留学は大学や学生にとって多大な労力や費用を要するものとなっている。それゆえ教育関係者は、留学実施の説明責任を果たすためにも、「留学の効果」について語学的側面の伸長のみならず、内面的な変容についても客観的なデータに基づくより深い理解がさらに必要である。しかしながら、内面的な変容については、留学終了後のアンケート調査等で参加者の留学の経験を評価することが多く、ほとんどは主観的なルーティーン的事後作業の域を出ていない。

本発表では、James Madison 大学の臨床心理学者である Dr. Craig Shealy が中心となって開発した BEVI (The Beliefs, Events, and Values Inventory) を用いて、約半年の北米留学を体験した大学生約 60 名を対象にして、留学前後にデータ収集を行った。BEVI は個人についての背景質問と、信念・価値や人生の出来事に関する 185 問の質問項目からなる。結果は 17 の尺度で測定され表示される。当日の発表では、留学前後で学生たちにどのような内的変容が生じたのかに加えて、3 つのキャンパスごとの比較や、他の大学のデータとの比較も報告する予定である。